保育園児の上咽頭検出インフルエンザ菌の変遷について

伊藤真人　　波多野　都
金沢大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科

我々は10年前から同一の保育園において，保育園児の上咽頭細菌叢の状態を調査し報告してきた．この定点調査を開始した1999年当時は，肺炎球菌では極めて高率にペニシリン耐性菌（PRSP）が検出されたにも関わらず，インフルエンザ菌の耐性化はそれほど進行していなかった（BLNARが24%，β－ラクタマーゼ産生株が6％）．しかし，2004年頃にはインフルエンザ菌に占めるBLNARの割合が急増し（78%），臨床分離株にみられる耐性菌分離率を上回るものとなった．その後臨床分離株にも顕著なBLNARの増加が認められるようになってきている．一方我国においては，β－ラクタマーゼ産生株の検出頻度は低い状態が続いてきたが，2007年の保育園調査ではインフルエンザ菌の20%がβ－ラクタマーゼ産生株となっており増加傾向が認められた．さらに本年2008年の調査では著明な増加がみられ，インフルエンザ菌の83%がβ－ラクタマーゼ産生株となった．保育園という狭い特殊な環境では，かなりなスピードで細菌の伝播と流行の移り変わりがみられるが，β－ラクタマーゼ産生インフルエンザ菌の急激な増加という今回の結果は，今後の臨床検体からの分離率を予測する上で参考になるものであり，我国における今後の，インフルエンザ菌の更なる耐性化が危惧される．